

## グアテマラ国の衣服文化の研究 — グアテマラの男性民族服に対するスペインの影響 —

赤池 照子

(平成8年10月4日受理)

### A study of clothing culture of Guatemala —The Spanish influence on the mail folk costumes of Guatemala —

Teruko AKAIKE

(Received October 4, 1996)

#### はじめに

一般に文化は、人類が生活する社会の中で培われ、発展してきたことは周知のとおりである。衣服文化に於ても自然発生的に、織物が発明されるとそれを身体に巻いたり、中央に穴を明けて肩にかけたり、ほとんどの地域がいわゆる原始基本形態である貫頭衣か巻き衣であった。それが技術の発達や文化の発展によって袖をつけたり、ズボンを考えたり、刺繍をほどこしたりして居住地域の環境や風土、風習に適合した民族衣裳が成立した。更に侵略や交易による他民族の文化的影響をもこうむりながら変容してきた。しかし、近年は移りゆく時代の流れに沿ってそれぞれの民族衣裳は急速にその姿を消しつつある。そうした中でグアテマラに於ける女性の民族衣裳は、16世紀にスペインの植民地となりヨーロッパ文化と接触したにもかかわらず、現在なお原始基本形態である貫頭衣に巻き衣のスタイルである。しかし、スペインの影響が全くなかったわけではなく、ショールやエプロン、また、袖口や襟首に飾るレースや刺繍文様などはあきらかに影響を受けている。最初の頃は徐々にであったがやがて文様や色彩が定着し、それが村の特徴となっていた。しかし、極く最近では交通機関の発達により、行商人が各村の市や祭に出入りし、既製のものや輸入の化学繊維の糸などを売り歩くことから、民族衣裳の特徴もめまぐるしく変わりつつある。このようなことから、グアテマラの民族衣裳もやがては消失し、洋服に同化していく

のもそう遠くない事実であり、調査が急がれるのである。一方、男性の伝統衣裳については、一部の村にわずかに残っている程度ですでに若者を中心にヨーロッパのスタイルが目立ってきている。(写真1)

今回、グアテマラ在中のオルガ・アリオラ・デ・ヘング著の「グアテマラの民族衣裳におけるスペインの影響と織り手たち」をもとに生活資料館に保存されている民族衣裳と照らし合わせながら男性衣裳について検討した。

#### 大航海時代

15世紀のスペインは、カステリヤ王国のイサベル女王(1451~1504)のもと、強力な統一国家の建設をめざしていた。8世紀以後スペインを支配していたイスラム教徒の最後の拠点であるグラナダ王国も征服、中央集権的カトリックスペイン王国の基礎を確めた。また、コロンブスのアメリカ大陸発見(1492)を援助し、その後50年に渡って利益期待の野望で次々に探検家や兵士が新大陸に渡った。1521年にはエルナンド・コルテスがメキシコ、グアテマラを征服し、新大陸から獲得した豊富な金銀によって、スペインは益々栄えた。

グアテマラは当時、言語ごとに王国を構え首長を中心とした独特な生活文化であった。(現在のグアテマラでは22の言語をもつ種族が存在している)。古代マヤ族の末裔といわれ、マヤ文明では、はやくも文字が発達し、天文学、歴史、数学に優れた文明であった。原住民にはマヤの歴史や儀式、気象天文学、占星術、神話あるいは病気に対する治療法、農業、商業など織物に至るまで生活全般の記録があったが、そのほとんどは征服時にスベ



写真1 祭の行列にマリンバを奏する男性 タクティク村（ケクチー族）



写真4 儀式用の衣装  
チチカステナンゴ村  
（キチュー族）



写真7 ソローラ村の子供（カクチケル族）  
大人とお揃いの衣装  
カミサ、パンタロン、  
ロディリエラ

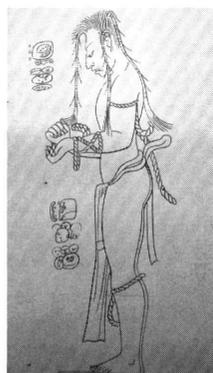


写真2 スペイン侵略前の男の姿



写真5 儀式用衣装のうしろ



写真8 サン・マルチーン・サカテペケス村の男性民族衣装、カミサ、パンタロン、ファハ（マム族）



写真3 祭の行列に蝶燭をもって  
タクティク村（ケクチー族）



写真6 スーテを頭にかぶる

グアテマラ国の衣服文化の研究



写真9 サンタ・カタリーナ・パラオナ村のカピシャイ（カクチケル族）



写真12 メキシコの水売り 19世紀中頃

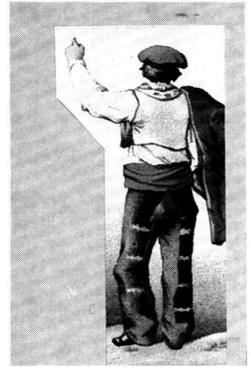


写真15 バスク地方の農民 派手なファハが目立つ



写真10 スペインの水売り ベラスケス画



写真13 トードス・サントス・クチュマタン村の男性（マム族）



写真16 ヴァレンシア地方の農民 ムーア人の流れを受け継いでいる。ゆったりしたズボン、巾広い帯。前垂と後垂。フェルトのソンプレロ



写真11 サンファン・アティタン村のタバルト（黒）（マム族）



写真14 ソブレパンタロン

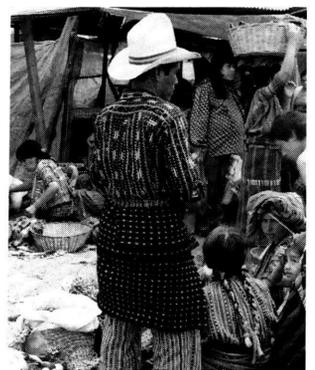


写真17 ソロラー村の男性（カクチケル族）

イン人によって悪習、邪教であるとして焼き払われてしまった。わずかに残された絵や絵文書、石碑から征服前のことを判読するにすぎない。しかし征服後のことは多くのスペインの宣教師や軍人たちが本国に送る報告書や見聞記によって残されている。

征服当時の原住民の服装は、男は掌の巾ぐらいの細布を腰のまわりに幾重にも巻いて、その端を前後に垂らし、四角い布を肩からかけていた。(写真 2)そして権力のある首長や神官は羽根を使った美しい布を肩からかけていた。女は中央に穴のあいた四角い布を肩から掛け、下半身を覆う布を巻いていた。父系社会の中で、女は夫に仕え家事、育児、水汲みに励み、特に機織は女にとって重要な仕事の一つであった。家族のためよりもむしろ首長や神官、上流階級の人のために織らされていた。

植民地の政策の一つにキリスト教への改宗が強制された。フランススコ会、ドミニコ会など王室から派遣された宣教師が村々を回ってキリスト教の教えを説き、教会を建てさせた。聖像や十字架の前に蝋燭をたてることを教え、蝋から蝋燭を作ることも教えられた。(写真 3)女性が教会に入る時はベールをかけなければならないことも教化した。改宗に熱心な宣教師たちは、それぞれの出身地であるスペインの習慣を植えつけようとし、それが現在グアテマラの男性の服装に残されている。更にスペインからは大陸の新転地で富みを得ようとする冒険者や様々な職業人が渡ってきた。そしてその職業を身につけるべくインディオたちはスペイン人に服従した。スペイン人と接触するようになると、裸のままではならず、ブルマー式半ズボンや衣服、うわぎ、マントなどを最初のうちは支給されたが、やがてスペインの職人の指導で器用に作って着るようになった。織物に関しては高機がスペインから導入され、毛織物と共に男がそれに当り、スカートの布地や毛織物などが生産されるようになった。このように種々の工業、商業が定着し、植民地政策も一応安定したがスペイン本国は政治的にも経済的にも衰微の一途をたどっていった。

19世紀になるとスペインの植民地は次々と独立を宣言し、やがてグアテマラも1847年に独立することができた。しかし、300年余りに渡るスペインの植民地政策はあらゆるところに影響を与えた。現在のグアテマラ原住民は、土着の文化と上手に融合させながら、グアテマラの新しい文化としての誇りを持っている。

### 男性の民族衣裳にみられるスペインの影響

グアテマラは土着の宗教をもつ信仰心の強い国民である。突然、スペインの征服者によってキリスト教に改宗させられた。しかし、偉大な歴史と伝統を持つインディオにとって、たやすく改宗できるものではない。表面的には改宗したように見せかけても、いけにえを捧げる土着の宗教もしっかり守っている。そのため、グアテマラではたくさんの宗教行事が行なわれ、それを司どる神官や役人(コフラディーア)呪術師が存在する。

チカステナンゴのコフラディーアの衣裳はスペインの山岳地帯の民族衣裳を模したものとされている。16~17世紀頃のスペインは貧富の差によって服制が敷かれていた。貴族などはゴージャスな服装であったが労働者や農民、店屋、仕立屋、大工のような職人は上流階級の人々のような服装は許されなかった。膝までのズボン、その下から出す白いズボン下、ジャケット、前垂れと後垂れであった。これらが変化しながらグアテマラに持ち込まれ男性衣裳として残っている。

#### ① 儀式用着用とズボン SacoとPantalon

黒羊毛の梳毛糸で作られた儀式用の着用とズボンである。宗教行事を行なう特権を持つ、いわゆる村の顔役が使用する衣裳でスペインの山岳地帯の民族衣裳からきているといわれる。ズボンの脇にパネルがはめられ、そこに刺繍が施されているが、キチエ族独特の太陽を象ったものといわれている。現在、この服装は祭や行事の他にホテルのボーイがこの民族衣裳を着て観光客のサービスに当たっている。これらは村の仕立て屋に注文する。(写真4.5)

#### ② スーテ(スカーフ、風呂敷) Tzute

アフリカの砂漠地帯に住む民族が用いていたスカーフである。8世紀頃、ムーア人がスペインに侵入、ゴールドバを中心にイスラム文化が栄えた。15世紀頃スペインの統一と共にゴールドバ地方を奪回、イスラム教徒は追放されたがスカーフは18世紀頃からスペインの農民に使われるようになった。いろいろな結びかたをするが、この上に帽子をかぶることもある。グアテマラではこれをスーテという名称で取り入れられた。

男性は主にコフラディーアが祭や行事のときにスーテを使う。村によって大きさや色、模様が異なるが、チカステナンゴのスーテは、双頭の鳥模様のある縫織で四隅に玉房飾りがついている。(写真 6)

また、グアテマラでは、スーテは多目的布としていろ

いろな使われ方をしている。サイズによって蠟燭用スーテ、笏用スーテ、聖像用スーテなどに分れており、儀式には無くなくてはならないものの一つである。また、道具の少ないグアテマラでは荷物を包んだり、赤ちゃんを包んで背負うにもスーテを使い、用の無い時は畳んで頭に乘せておけるので、大変便利である。

③ カミサ (シャツ) Camisa

男性用のシャツは元来、上着の下に着られていたもので世界のあらゆる階層の男性が使用している。現在のグアテマラでもほとんど衿とカフスのついた、ヨーロッパスタイル (スポーツシャツ) になってしまった。しかし、使用される布地は村によって色や模様が異なり、ソロラ村のように背や胸に刺繍の施されたものもある。ほとんど仕立て屋にもって行くが、今では既製品もある。

男性の伝統衣裳としてのカミサは今ではあまり見られないがサン・マルティン・サカテペサス村の資料によると白地の貫頭衣に縫取織の袖がついている。パンタロンの上から羽織って着、その上から帯を締める。(写真7.8)

④ カピシャイまたはカプサイ (外套) Capichaj

冬用のオーバーのことで、バスク地方の人が着た黒の粗毛製のダルマチカに似た形式のものである。ダルマチカはビザンチン時代に男女とも着用した衣裳で女性のは袖が広く男性のものは袖がいちじるしく狭くなっている。現在でもカトリックに於て司祭が原形をとどめた形の衣裳を着用している。16世紀頃には上着丈のダルマチカが見られる。

カピシャイは脇の下の開いている穴から腕を出すものと、この穴のないものがある。自然色の粗毛製で衿はV字にあいている。現在ではサンタ・カタリーナ・バラオナ村の男性がこれを着用している。(写真9)

⑤ タバルト (外套) Tabarut

ヨーロッパで15世紀から17世紀にかけて用いられた男子用上着にタブレットというのがある。行軍用マントで、ダルマチカに似た形をしているが、袖は短く鳥の翼のようである。スペインでは18世紀頃まで続き、これがグアテマラに伝わった。グアテマラ高地のサン・ファン・アテイタン、ソローラ、トードス・サントス・クチュマタンなどで使われている。サン・ファン・アテイタンのものは着丈が長く、特に後丈は15cmぐらいの差をつけ、後裾だけ房飾りがついている。そして、タバルトの上から巾の広い帯を締める。(写真10.11)

⑥ ソブレパンタロン Cobre pantalon

一般にズボンのことをパンタロンといている。パンタロンということばは17世紀イタリアの喜劇の道化役のパタローネが、足首よりやや短いだぶだぶのズボンを着用したことからはじまったといわれ、スペインでは1830年頃一般に用いられるようになった。グアテマラでもズボンをパンタロンと称している。ほとんど裁断することなく、脇と前後を縫い合せ、股に襠を入れただけである。色あいや縫取織模様は村によって違っている。

ソブレパンタロンは、木綿のパンタロンの上に履くズボンで、黒羊毛の粗毛ラシャを使って乗馬用に作られたものである。グアテマラが植民地となったとき、スペインから兵士や移民と共に、動物も輸入され、山羊や羊と一緒に馬も持ちこまれた。ソブレパンタロンはトードス・サントス・クチュマタン村にみられる。アンダルシア地方の馬乗りの衣裳といわれ、植民地の多くがこの地方の出身者だったことから影響を受けた。今でもトードス・サントス・クチュマタン村では、祭に男性たちが馬にまたがり鶏の首を蛮刀ではね、神々への生にえとする行事に履く。そのことからこの村の男性たちはソブレパンタロンを村の伝統衣裳として現在でも履いている。ヨーロッパの乗馬用オーバーズボンは革製で、脇が膝上まで開いているが、ソブレパンタロンは黒ラシャで前面鼠蹊部のところまで明き、そのまま着脱用の明きボタンへつながっていく。馬に乗る時は無くなくてはならないパンタロンである。(写真12.13.14)

⑦ ファハ (帯) Faja

起源はアラビアといわれる。スペインでは15世紀頃から使われはじめた。グアテマラでは女性はスカートの上から比較的男性よりひかえ目に使われているが、男性の場合は巾広で両端に刺繍や縫取織文様をつけたり、房飾りのつけたものもある。パンタロンの上から腰に巻いたり、或はカミサの上から巻くこともあり、赤や黄、緑など、村ごとに特色をもった色彩の帯である。帯は普遍的な衣裳の一つなので、ヨーロッパ、トルコ、アラビア、日本などいろいろな民族の中に見られる。征服以前のマヤでも使っていた。したがって帯に関してはスペインの影響とはいえないかも知れないが、カミサやパンタロンの上から大胆に結ぶ用い方は、スペインの農民にも見られる。(写真15)

⑧ ロディリエラ (前掛風腰布) Rodillera

もともとグアテマラは綿の産出国である。したがってほとんどの織物は木綿であったが、スペインの侵入に



写真18 サン・ファン・サカテペケス村の男性のサコ（カクチケル族）



写真20 カパを着たコフラディーア、チチカステナンゴ村



写真19 チャフル村の男女の服装（イシル族）



写真21 アラゴン地方の農民とマントを着る司祭



写真22 ラビナル村の家族（キチエー族）

よって羊毛がもたらせられ、羊毛製品が用いられるようになった。羊毛に関するすべての仕事は男性の仕事とした。ロディリェラは白と黒の羊毛をそのまま紡いで織り、フェルト状に手を加えたものである。スペインの農民の前垂れと後垂れがグアテマラでロディリェラに変わったといわれているが、ナウラ村、ソローラ村の男性に多く用いられている。腰にまわるぐらいの大きさのものをパンタロンの上から巻き、帯を締める。パンタロンを短く履くこともあって、まるでスカートのように見えることもある。別名ブランケットともいう。(写真16.17)

⑨ サコ(上着) Saco

上半身に着る男性用衣裳で、前開きはファスナーになっている。ソローラ村のサコは白と黒の羊毛を天然色のまま紡ぎ、綿に織り上げた材料で仕立てられている。背中に蝙蝠が翼を広げたような模様が細いリボンで施されていて、ソローラ村の顔役達の伝統衣裳として定着して

いる。

サンファン・サテペケス村のものは、茶綿で織った布地に、その村の特色の色である紫と黄の色彩を使って、袖口と裾に刺繍を施してある。(写真18)

⑩ ジャケット(上着) Jacket

ジャケットの名称がヨーロッパの服飾にあらわれたのは、15世紀頃といわれる。19世紀半ばごろには盛んに用いられたが、グアテマラに入ってきたのは近代で、サコに変わって使われるようになってきている。地機で織った布を背広に似せて裁断して作った上着で、儀式用に使われている。チャフル村では、女性の赤いウイビールやコルテに合せて、真赤なジャケットに衿と袖口、刺繍模様を黒を使った非常にコントラストの強いジャケットである。(写真19)

⑪ カパ(ケープ) Capa

16世紀にスペインで最もよく使われたものの一つで

ある。庶民のものは長いものを着て、貴族や上流階級のものは短かった。材料は毛またはその他の布で作られ、袖がなく、円形または円に近い形である。いったん影を潜めるがふたたび19世紀頃になると防寒用として使われるようになった。ビザンチン時代のパルダメントウムが宗教服に残り、宣教師からグアテマラに伝わった。グアテマラのカバは、黒羊毛の梳毛糸で作られ、主に男性が使用していたが、現在では一部の村で宗教行事の時、コフラデーアが民族衣裳の上から羽織って使うのみとなってしまった。生活資料館には現在のところカバは収蔵されていない。(写真20.21)

⑫ ソンブレロ (帽子) Sombrero

ソンブレロはスペイン、メキシコ、南アメリカのカウボーイがかぶるつばの広い帽子をさすように思われているが、もともとスペイン語で帽子のことをソンブレロという。スペイン人の帽子は、上流階層の間で、様々に変化していったが、農民や職人が普通に使った帽子は、冬はフェルト製のつばが広いもので、夏はヤシ(シュロ)製であった。これがグアテマラの男性に取り入れられた。つばの広いフェルトの帽子はチャンベルゴとも呼ばれ、タールを塗って光らせたもので、現在では儀式用に残っている。一般にはヤシ製のつばの狭い帽子で、クラウンのところにリボン飾りがついているが、赤いスーテを巻くこともある。現在では、大抵の村でズボン・ワイシャツ・ソンブレロが男性のスタイルになってしまった。

(写真22)

おわりに

スペインの利益獲得と世界市場の開発の野望のもと、大航海時代が始まった。グアテマラが植民地となるとスペインの王室は職人の移住を奨励し始めた。刺繍職人、織物職人、銀細工師、鍛冶屋、仕立屋、靴屋、大工等が移住し大量かつ安価な労働力で使える原住民に目をつけた。グアテマラの原住民は半ば強制的に奴隷のように働かされた。しかし、そうした苦しい中でも、従来のマヤの流れを汲んだ人々である。持前の頭の良さ、器用さは今日の織物などに現れている。

コフラデーアが存在したのはスペインでは中世ころ

からであった。同業者がその職の守護聖人を祀った組織で、スペインでは17世紀に隆盛した。グアテマラでも、カトリックの布教が盛んな16世紀始めころ、コフラデーアは教会の聖体を安置したり、聖人の祭の世話をしたり村の顔役であった。祭には供物を捧げ、音楽を奏で行列を行った。この事からグアテマラの原住民には普段着の他に儀式用の衣裳が作られるようになった。

民族衣裳というのは、日本の場合でも原始衣服は貫頭衣に腰布であった。大陸との接触によって衣と裳に発達し、十二単衣から小袖が定着し「きもの」と呼ばれるようになった。グアテマラの場合、ヨーロッパ文化が入ってきて、当然原住民の生活も急速に発達してもおかしくはなかったが、征服者に使われる身、土地と自由を失ったところには衣裳の発達の余地はなかった。

グアテマラの男性は、スペイン人との接触が早かったため、スペインの職人や店員などの服装と同様の衣裳を着るようになったが、スペインからの独立後は経済的不安定と共にクーデターやテロ活動、暴動が起り、いっこうに安定した生活を迎えることができない。そのため衣裳の変化はおこらず、これが民族衣裳として定着したように思われる。しかし、これから、国際化が進み、経済が豊かになり商業や工業が発達してくるとグアテマラの衣裳もそう遠くない将来、世界の服装に同化することであろう。

参考文献

- 1) Olga Arriola de Geng ; LOS TEJEDORES EN GUATEMALA Y LA INFLUENCIA ESPANOLA EN EL TRAJE INDIGENA 1991
- 2) 児島英雄 ; 染織の美 28 京都書院 1984
- 3) 小川安朗 ; 世界民族服飾集成 文化出版局 1991
- 4) 丹野 郁 ; 服飾の世界史 白水社 1985
- 5) 近藤敦子 ; グアテマラの現代史 彩流社 1996
- 6) 赤池照子 ; メキシコ・グアテマラの衣服文化の研究  
グアテマラの民族衣裳における文様と色彩 東京家政大学紀要30 P.87~94